

第4章 報道デスクへのインタビュー調査

本章は、テレビ社の報道デスクを対象に行ったインタビュー調査の結果を報告する。インタビューを実施した社名・担当者名は図表4-1-1のとおり。

図表4-1-1. 本調査のインタビュー先

社名	名前	所属・肩書	実施日
北海道テレビ放送	海野祐至	報道部副部長	2021/10/21
IBC岩手放送	瀬谷佳子	報道部副部長	2021/11/12
秋田テレビ	黒沢賛	報道制作センター 報道デスク	2021/11/10
フジテレビジョン	山口吉博	社会部デスク	2021/11/9
千葉テレビ放送	福永修久	報道部長	2021/10/6
テレビ新潟放送網	倉島実	報道部副部長	2021/11/18
テレビ金沢	岡本達生	報道部長	2021/11/11
名古屋テレビ放送	石川智通	報道情報局報道センター編集長	2021/11/15
京都放送	野村大輔	報道部長	2021/11/17
読売テレビ	川上幸治	報道局デスク	2021/11/26
RKB毎日放送	櫛山道太	報道部 担当部長	2021/10/7
琉球放送	野沢周平	報道制作部 報道デスク	2021/10/5

(肩書はインタビュー時。敬称略)

調査は2021年10月5日から11月26日の期間に実施。「Microsoft Teams」を使い、オンラインでインタビューを行った。なお、本インタビュー調査を実施した2021年10月から11月にかけては、感染者数も減り、9月30日には緊急事態宣言が全国で解除、政府「新型コロナウイルス感染症対策分科会」が11月8日に感染状況を評価する新しい指標を決め、従来の新規感染者数を重視した4つのステージから、医療の逼迫の状況に応じて5つのレベルに分けるなど、感染の状況が落ち着いていた時期であったことを付記する（文末の（多）は感染者の多かったエリア、（少）は感染者の少なかったエリアの社）。

(1) 取材活動で悩んだこと

① 取材時のスタッフの感染への不安

コロナの感染拡大が始まった初期の段階での不安や葛藤に関する意見が多く聞かれた。家庭の事情もあり取材を拒む記者や臆病になる記者がいたことも吐露されている。また繁華街などへの取材に懸念があったこと、会見などの取材に行かせないと判断したとの意見もみられた。この点においては、放送エリアにおける感染者数の多寡で違いはみられない。

他方、事件現場と同じであり、きちんと距離を取ることで対処した、あるいはリスクを負うことにある程度のコンセンサスがあった、取材すべきものは取材するとのスタンスで臨んだ、といった意見もあった。

<初期の取材に不安>

普通に取材をしている分にはマスクを外すこともなく、取材対象者と密になることはあまりないので、通常の取材の中での感染の不安はそこまでなかった。ただし、初期の段階では得体の知れないもので、空気感染なのかどうか分からない中、高齢者と一緒に住んでいるので、できれば取材に出たくないという記者もいたので困った。

(少)

初期のころは不安を抱えつつの取材だった。ガンマイクを使って距離を置く、インタビューの時もドアを開けて換気を行う状況を作り、それができなければ外に出る、当初はできなかったがオンラインのインタビューを推奨するなど、切り替えていった。(多)

はじめての経験で手探りの状況。どこまでやれるのかという部分の線引きで、臆病になったのは事実。同時にニュースバリューは高く、やらなければならない。一方で感染を防ぐという、相反する部分があった。当然、記者の中でも「かまわない、行きます」という記者もいれば、臆病になる記者もいたが、その点は尊重した。逆に言うと、行こうと思う記者に対して「(そこまで) やらなくていいじゃないか」と歯止めをかけたこともある。そのさじ加減や線引きを事案ごとに判断する難しさを感じた。

例えば空港で目の前にいる外国人に対し、話を聞くのか。当時はどこまで寄ると感染リスクが高まるのかといったことも分からなかった。当然ながら無理はさせない。撮れる範囲で撮ればいいと言ったが、どこまでやれるか難しい判断だった。(多)

<取材に行かせることに懸念・葛藤>

距離を取る、マスクを着用するなど十分注意をして行ったが、目に見えないものがあり、感染の恐れが絶対がないという確証は持てなかった。また、先方からぜひ取材をして欲しい、われわれも取材をしたいと考えている対象にどこまで取材して良いのか悩むことはあった。(多)

繁華街や感染者が出た場所へ取材に行かせることに懸念。ただし時期によっても変化しており、気を付けながらも外に出した。(少)

カメラマンや記者、外部の制作スタッフが日々取材活動で外に出ており、いろいろな人と接触する。ソーシャルディスタンスを取っているとはいえ、万が一感染者との接触が確認された場合は、2日にさかのぼって接触履歴を調べなければならない。そういうことを配慮すると、今までやってきた通常の活動をそのまま行ってしまうと感染リスクが下がらない。市町村の会見においても、場合によっては、紙資料で担当課に問い

合わせ、それで可能な場合は記者を行かせないなどの慎重な対応を取っていた。

記者からすると足りないと思う部分もあっただろうが、納得するまで担当課に電話取材させていた。(多)

<従来スタンスで取材に臨む>

ウイルスに対する知識もほぼないまま病院等の取材に行っていた。会社としての対応は後手に回った感じがあった。ある程度意識はしていたが、当時としては普通の災害や事件・事故現場に行くような感覚だった。

基本的には取材機会あれば行かないことはないが、マスク着用や、最少人数に限る、対面のインタビューはガンマイクを使い、距離を取って行うなど対処した。(多)

取材者の感染リスクに関し、火事の現場や事件・事故現場など、われわれはいつもある程度危険を伴うリスクを負っている。そのことで取材者とのコンセンサスは一定程度あると思う。(多)

当初は感染する可能性があると思っていた。一方で初期のころ、コロナは若い人は重症化しないなどと言われていた。現場は若い記者が多いので、かかっても重症化しないのかなというところからスタートし、取材すべきものは取材するというスタンスで臨んでいた。(多)

② 感染の媒介になることへの不安

取材班が取材に行くことに対し、来ないでほしいと言われたなどの事例が明かされた。これも感染者が多いエリア、少ないエリアのテレビ社いずれからも聞かれた。取材時に来ないでほしいと言われることも想定した結果、取材機会を逸することもあったという。そうした中、記者の不安に対する心のケアを共有するように心がけたといった意見もあった。

取材者が感染している可能性もあるとして、取材の不安を払しょくするため、取材相手との距離を取る、必要に応じてPCR検査を受ける、など対策がこの観点からも取られている。一方で、公共施設はそもそも取材を受けてくれなかった、といった話も聞かれた。また配慮し、取材に行かないこととしたが「先方から残念がられ、なんとも苦しい思いをしたこともあった」といった声も。

<取材先からの拒否>

感染源や感染の仲介になってはならないと配慮した。肌感覚の恐怖は記者やカメラマンら現場のほうが強かったと思う。そこはなるべく共有し不安の解消に努めた。

自社の放送エリアは感染者がなかなか出なかった。現在も多くはない。県民の意識は高く、それゆえ矢面に立つことが多い。「あなたたちが動いているからいけない」「取材しているあなたたちの気が知れない」などという人に遭遇する記者やカメラマンが多かったので、心のケアができるように心がけた。必要のない現場には行かせないというスタンスだった。(少)

正直「来ないでくれ」と、相当言われた。自社の放送エリアで感染が広がっている状況で地方に取材で行くと風当たりが強かった。どこで誰が感染しているのか分からない状況下、われわれがどこかに行くのを嫌がる部分は増えた。

取材にあたってPCR検査を求められ、検査で陰性が分かっただけで取材を受けてもらえる、あるいは地方にお邪魔するケースもあった。その点はお互いさまで、われわれが行くことで感染させてしまうことも怖かった。

極力、感染などのリスクを避けていた時期があった。(多)

本社のある中心都市から田舎へ取材に行っても「来たから怖い」と言われることはまずなかった。(少)

取材で「来るな」と言われることは必ずあると思っていたので、悩みとまではいかなかったが、それによって取材機会を逸することはあった。(多)

<距離を保って取材>

取材に関しては、一般の方をはじめ、相手方がナーバスになることはあまりなかった。マイクを棒の先に付けて距離を取るなどの対策を取っていた。「来ないでくれ」と言われたのは、個別一般の取材ではなかった。他方、学校など公共の場所では、そもそも取材を受け付けていないと言われたことはあった。(多)

スタッフも症状が出ていないだけで、実は感染している可能性もあったので、街頭インタビューの際もマイクを通常より3倍長い棒の先に付けて行った。また、緊急事態宣言中は飲食店自体の取材をしないと決めた。

感染しない、させないが判断基準。メディアとして密にならないことや人同士が近づかないことを報じていたこともあり、その一方で近づいてインタビューしてきたことが問題になりかねなかったので、取材の場合も一定の距離を取った。(多)

この情勢下、テレビに対する世間の見方を考えると、コロナウイルスに取材者が感染するリスクよりも、取材時に問題が起きた際にいらぬ憶測や批判、不安のもとになることを恐れ、気を付けるようにした。

そこでマスクの着用等の対策や必要に応じてPCR検査を行い、相手の理解を得たうえで取材を行った。(多)

2020年4月の初めに出演者から陽性者が出て、看板番組である午後のワイドが休止する事態となった。そのあたりから危機感が出てきた。感染して自分たちが苦しむ、というよりは、それだけの強い影響力を番組や視聴者に及ぼしてしまうことが会社として大きかった。

取材相手に一番してはならないのがウイルスを持ち込むこととなり、だからこそ、会う時は距離の取り方や装備、マスクの着用など、かなり厳しく言っていた。(多)

放送エリア外への取材は基本的に控えた。特に緊急事態宣言中は原則禁止で、行く

場合はPCR検査を受けてから行くことを徹底した。

離れたところへの取材で、直接的に忌避されるような反応はなかったが、不要不急の渡航を避けることが求められ、われわれ自身もそれを呼びかけていたので、災害などがない限りは行かないことにしていた。他方、台風の時期に、PCR検査を受けてから行くので時間差が生まれ、思うように現地に入れない事例があった。(多)

<取材相手との意識の差>

コロナと関係ない取材で、「ぜひ取材してほしい」と言われて対象者の家に行ったが、高齢者がいる時に「全然気にしていない」と言われても、ワクチンも接種していない中、万が一自分たちがコロナに感染していたことで、高齢者にうつしてしまうことを懸念し止めたこともあった。先方から残念がられ、なんとも苦しい思いをした。

緊急事態宣言が発令されている間は、よほどの大事件でない限り、本社のある地域以外に行かないようにした。行くと嫌がられる例もあった。(多)

③ 視聴者への見え方に配慮

取材時の映像が画面にどう映るか、すなわち視聴者への見え方に関する懸念が多く聞かれている。このために、あえてインタビューの際に距離を取っている旨のワンカットを使ったなどの意見があった。また、レポートの際にアナウンサーの顔出しレポートは止める、観光施設のレポートの際、マスクを外すシーンを止める、食リポを止めて、局内に持ち込んで食べる、帰省客等の取材の際に顔を特定する撮り方は止めるといった意見も多い。さらに、配信は止めるなど対応している社もあった。

<取材時の配慮をオンエアで見せる>

安全面以外にも、感染のリスクをできるだけ軽減しながら取材しているというポーズで、見られた形を気にしていた。きちんとマスクをし、取材対象にもマスクをしてもらうといったことや、食べるシーンなど撮影上のルールを決めて制作していた。

画面上で映ってどう思われるかが一番の心配で、そこを重視していたように思う。他社のニュースのオンエアも見ながら対応していた。(多)

インタビューの際は離れて撮っているが、放送においてもインタビューの前に距離を取っている旨のワンカットを使った。また、必ずカメラ位置が分かるよう、取材対象者と近づいていないことを示すカットを必要に応じて入れたり、そうした映像を必ず使うといった配慮をしていた。(多)

毎日、夕方になると視聴者センターからメールが回ってくる。初期のころは、その中にマスクを付けることや、さらには取材すること自体どうなのか、といった意見が山ほど寄せられた。映さないとこちらの恰好や、相手にどう接しているかが見えない。そこでマイクのブームを伸ばした形で録っていることや、フェイスシールドを付けてることなどのカットをあえて入れた。いままも接近したカットは撮っていないし、

そういうシーンにはパーテーションを置いている。

インタビューもリモートで、と言われたらそうしている。ただし、リモート取材は、切り取られた画面の中しか使えず、周りの風景や雰囲気などが伝わりづらいこともあり、「画が足りない」という苦労があった。(多)

インタビューの際、毎回ではないが、距離を取っていることを見せるカットを1つ入れるようにした。

スタジオの演出においても、キャスター間の距離を取る、ゲスト、専門家に話を聞く際はZoomなどを使って遠隔で行う、どうしても入れる場合は、パネルを立てて、距離を取るなど工夫した。そうした中でカメラ割りなどの苦労はあり、そのバランス・兼ね合いを考えた。(多)

<取材時に配慮>

テレビで一番多い取材は、町の人々の声を聞く街録で、何かがあれば取材することが多いが、そもそも論として距離感は大丈夫なのか、マスクをして入れればOKなのか。視聴者からは、街に出るなど言いながら、人に話を聞いているのではないかといった意見があった。それに対し、マスクやマイクを棒の先に付けるなどの見え方も含め、どう解消するのか悩みながら行った。画角によっては、距離は取っていても寄って見えるなど使いづらいことがあった。

放送エリアは、都市部と地方で人口に差があり、かつ距離がある。人が少なく感染も起きていないエリアの町のイベントを取材すると子どもたちがマスクをせずに大会に参加しているが、マスクしてくださいとも言えない。その点は悩んだ。その映像を使うことで、全く関係ない地域から非難もあるだろう。われわれの中でも「止めたほうがいいのでは」「いや、感染も起きてない」などと議論。難しい判断を迫られた。(多)

地元自治体の中心都市で感染者が増えている中で、顔の知られているアナウンサーが各地に顔出ししながら出向くのはどうなのか、と部内で話があり、なるべく顔出しのレポートは取らないようにするなど配慮した。

感染者が増え、移動を控えている時期なのにアナウンサーが見えると、視聴者から「テレビだけいろいろなところに行っている」と思われるのはうまくない、との判断からだった。(少)

東京オリンピック・パラリンピックの際に空港から選手が続々と入ってきた時、各社は飛行機を下りてゲートまで入って取材を行っていたが、当社はそこまで突っ込むのは止めようと判断し、行かなかった。理由は見せ方と、感染リスクのため。

また、見え方に関しては、アナウンサーが観光施設のレポートの際、周りが畑などでも必ずマスクを着け、マスクを外すシーンをあえてなくした。リポーターの食リポ

も止めて、メニューを局に持ってきて食べるような見せ方にした。(多)

一番悩んだのは、マスクしていない人を撮るかどうか、レポートの時にマスクをするかどうか。広い範囲の中で、農家の方がたたずんでいる時はいいのではないか、などの意見があった。

オリンピックのメダリストの出演もほぼオンラインとし、生放送でも別室でスタジオに来ない形にするなど、配慮し過ぎかもしれないがそこまでやった。対策はできる限りしたほうがいいとの考えからだった。(少)

放送エリアは南北に長く、最初のころは感染者が出ていない地域もあった。県外のナンバーには懸念の声もあったが、取材車は県内ナンバーなので問題にならなかった。

お盆や規制の時期などに観光客や帰省客の取材も行ったが、顔を出す／出さないは、本人がよくても家族が迷惑な時もある。そこでお盆の時期は顔が特定できる撮り方は止めるルールにした。

取材した人から、全国ニュースは止めてと言われることもあった。そこでエリア内の放送にとどめ、配信は止めるなどの対応を取った。(少)

④ 病院や施設の取材に苦慮

コロナ患者を収容した病院やクラスターの発生した病院・施設、コロナの陽性反応が出た人の取材を行った社にその詳細を尋ねた。インタビューからは、外観のみを撮影した、内部は関係者に機材を渡して撮影してもらった、内部も撮影してよい／いけないの線引きがあった、などの実態が浮かび上がった。病院等の内部を取材した社からは、緊急事態宣言が収まった後、消毒され、患者との接触機会のないグリーンゾーンに限って認められた、患者のいない、稼働したばかりの施設を取材した、といった具体例が挙げられた。また、無理やりに見える取材は避ける、取材者の意思・状況を尊重したとの声も聞かれた。一方で、マニュアルに従えば感染するリスクはない、ふだんの事件現場の取材と同レベル、との意見もあった。このほか、コロナの陽性反応のあった人への取材もPCR検査で陰性が確認された後や回復してから取材した、などの話が聞けた。

取材をしなかった、あるいはできなかった社の意見として、系列のマニュアルでNGになっていた、会社として緊急事態宣言下では病院の中は取材しないと決めていた、放送の影響を勘案した、取材する中で治療の最前線にあたっている人に迷惑をかけない、との配慮から控えた、などの意見があった。

<外観のみ取材／機材を渡して取材>

クラスターが発生した学校や病院、高齢者施設など施設は遠めの外観だけで、クラスターが発生したニュースとして放送した。施設を遠目から外観を撮る分には感染の心配はない。病院などは中の取材はできなかったが、収束した後に院長のインタビュー

一を行った。基本は、病院で感染者が出て休館になっている、といった生活情報の一つとして外観を見せる、という意味合いだった。

最初は施設名も出していたが、公の地域の総合病院でない限りは、ある程度日数が立ち、濃厚接触者が増えても施設名を出さなかった。

学校で感染者が増え、クラスターになり、休校になると、保護者からクレームが来る。「なんで出すのだ」と。発表しているから出しているんだといっても視聴者はきかない。ただただ差別が生まれると電話が来る。地元の地元紙が学校名を出さない。「新聞では出していない、なんでテレビでは出すのか」と強めのクレームが来る。そこで特に学校に関してはとても気を使っている。昨日も休校のリリースが来た。クラスターは発生していないので、学校名は出さずに〇〇市内の学校、とした。視聴者がピリピリしており自分の子どものいる学校名を出すことをすごく嫌う。(少)

コロナ患者を収容した病院は、医療の逼迫度合を取材。コロナ病棟内への立ち入りは無く、内部映像は医療関係者に家庭用カメラで撮影していただき、その動画をSDカードやファイル便でもらうなどの形を取っていた。中の人間に直接会うことはなかった。

クラスターの発生した施設は、障がい者施設で100人規模のクラスターが発生したため取材。規模が大きかったので報道の使命を勘案した。当社単独ではなく他社も来ていた。施設の外に代表が来て、距離を取ったうえで合同取材を行った。基本は外での取材だった。施設の中に立ち入ったことはなく玄関や入り口で運ばれていくところを取材した。内部に立ち入るのは、行政もお断りだった。

コロナの陽性反応が出た人は、ホテル療養等の状況を取材するために行った。報道の使命・重要性を考えた。ただし、極力オンラインを活用した。(多)

感染者を収容した病院の取材が一番悩んだ。地元のある病院を取材したが、感染対策を徹底しており、そのことをPRしていた。一方、当社は感染者を受け入れている病院はオンライン取材で、との指針だった。病院は「看護師が一番差別を受けていた。感染対策をしているのに受け入れてくれない」と主張。向こうが対面取材OKなので悩んだ。結局われわれがウイルスを持ち込む可能性があるので、感染病棟に従事している看護師等はオンライン、院長は対面取材にした。病院側がOKならば行きたいがそのもどかしさがあった。

2021年に入り、カメラで撮ることを受け入れる病院もあったが、搬入時や治療時の映像までビデオで撮らせてもらえる病院はなかった。(少)

病院はかなり注意を払って取材した。施設の関係者にカメラを渡し取材してもらったこともあった。県内の病院でクラスター発生がいくつかあり、敷地外からの取材を指示した。建物内の関係者との接触はためらわれた (少)

コロナ患者を収容した病院は医師立会いの下取材した。感染対策の装備や対策を施すとともに場所を考え、陰圧室の外で行った。病院の中は医師から撮影した映像をもらった。エリアを分けて感染対策をしたので不安はなかった。

陽性になった人の取材は、個別のケースとして、感染した場合にどのような症状が出たのかを伝えようと取材した。PCR検査で陰性反応が出て、取材がOKになったことを確認。取材時は、換気を行い距離を取ったので気にしなかった。(多)

<病院内部等を取材>

コロナ患者を収容した病院やクラスターが発生した施設も取材したが、相当ケアをした。病院の中でもここまで撮っていい、いけないの線引きがあった。

記者が取材に行く前に取材のスタンスや方針を持ってきたのに対し、ここまでならいい、ここまでしなくていいという判断をした。病院側も感染させたくないの、この先は入らないで下さい、というところもあった。まったく近寄らないことはなかった。ただし、患者等に接するところまではなかったように思う。(多)

緊急事態宣言が納まり、地元自治体が独自の基準で警戒している時期があった。一般の活動は戻りつつあるが、厳しい状況に置かれている病院の取材がしたかった。緊急事態宣言下ではないので取材を許可した。病院はグリーンゾーン、レッドゾーンに分かれていた。グリーンゾーンは消毒等がなされ、患者との接触機会もない。そのグリーンゾーンの取材に限って認めた。病院がいかに大変な状況か十分伝えることができた。当社としては病院内の取材は許可するが、極力患者と接しないところまでに止めるとの判断をした。ただし地元社の判断は分かれ、レッドゾーンでの取材を行っているところもあった。

会社としては極力そうしたところには行かない、という大方針があった。そのうえで現場の判断に拠った。病院のひっ迫状況にも拠っており、多くの患者が運び込まれているところは行かないようにした。この病院ならばきちんとゾーン分けされているなど、病院ごとに判断。そのうえで現場にOKを出した。取材した記者は感染のリスクがあったので、一日休んでもらい、体調の変化をみた。(多)

病院、医療関連施設は、使用していない段階の設備や患者が中にいなかったり、設置したばかり、稼働したばかりの施設は中も取材した。患者がいる施設は、関係者にビデオを渡して撮影してもらうなどして対応した。

陽性が出た人は、回復してから取材した。(多)

新型コロナの正しい情報を視聴者に伝えるために、取材と報道自体は実施すべきだと考えていた。ただ、実際に取材するかどうかの判断にあたっては相手先が対応できる状態にあるかどうかが大きく、“無理矢理”の取材、あるいは視聴者からそうみられかねない取材は避けるようにしていた。

県境をまたいだ移動は避けてほしいなど、相手先から求められた場合は従うようにした。中には防護服の着用まで求められるようなケースもあったようだ。

陽性反応が出た人の取材に関しては、その後のPCR検査で陰性に転じた人のみを対面取材の対象にし、それ以外はリモート取材とした。

取材者個人が基礎疾患などを抱えており行きたくないとする場合や、仮に本人がOKでも家族がNGと考える場合などもあり、そこは無理強いせず尊重していた。

(多)

クラスターが発生した施設やコロナの陽性反応が出た人への取材は、なにが感染対策につながるのかに気を付けたうえで取材にあたっていた。マニュアルに則って取材すれば、まずは感染するリスクはないだろうと考えた。感染リスクを完全にゼロにはできないが、われわれがふだん行っている火事や事件、事故の現場の取材といわば同レベル。記者として現場に行く以上、そうしたリスクを知ったうえで、国民からの知る権利の負託に応えるのはもちろんのこと。そうした意味での不安はなかった。

クラスターが発生した施設等の取材は、ふだんの取材のリスクと同レベルにある中、むしろ国民の知る権利に応えたいとの考えの下、対策を立てていた。(多)

<取材しなかった／できなかった事例>

クラスターが発生した病院への取材は、病院内には地元放送エリアではどの社も入っていない。病院の外観の撮影や関係者への取材は行ったが、現場に行くことはしなかった。(少)

感染病棟の中を見せてくれる病院もあったが、厳しい状況の病院は、交渉不足もあり、取材できなかった。(少)

コロナ患者を収容した病院の取材は、系列のマニュアルでは基本NGになっていた。ある程度キー局の動きも参考にした。コロナ感染の最初期はNGだった。今は一律ダメではない。(少)

スタッフが感染しないことが一番の基準としてあった。緊急事態宣言中は病院の中の取材はそもそもしないことを会社として決めた。

行政機関によってどこがクラスターかどうかをはっきりいわないところがあり、それが一つ大きな問題だった。取材の過程でどこがクラスターかを周辺に聞くことで、間違った風評被害が出てしまう恐れがあった。明確にここから出たというところは、撮影したこともあったが、中に入って関係者の取材をすることはなかった。(多)

患者が入っているところを取材するのは、医療関係者もおおり、万が一トラブルが起きた場合に影響が非常に大きい。取材する中で治療の最前線にあたっている人に影響や迷惑をかけたくない、との配慮があった。感染のリスクというよりも病院への迷惑を踏まえた判断だった。(多)

クラスターの発生した施設は取材の必要性を感じなかった。カラオケや老人ホームのほうで感染リスクがあった。(多)

⑤ チーム内での意見・意識の違い

チーム内の意見や意識の違い関しても多くの意見が上がった。例えばコミュニケーションでロスがあったこと。あるいは撮影した映像の使用で議論になった、など。取材先がOKなのにと記者に食い下がられたこともあったようだ。

一方で、ミーティングにおいてカメラマンの意見を吸い上げた、記者の意思を尊重した、現場の判断を尊重した、などの話も聞かれた。取材に行きたくない、といったことは特になかった、記者との間で大きく意見が変わることはなかった、との発言も多い。

<意見の違いで議論>

コミュニケーションを取る部分で、対面取材でこういうところが面白いなどと会話ができない場面があり、いろいろな意味でロスがあった。(多)

飲食店において、黙食が推奨されていた。ただし、営業再開の時にインタビューをすると、どうしてもマスクを外して答えてしまう。ディレクターによると、この人は食べている最中に対応していたので問題ないとのことだったが、放送を見るとマスクをはずしてしゃべっているということになってしまう。撮った映像をどう使うかで議論になったことがあった。われわれが使ってもいいと判断しても、視聴者が見ることで、当人に不利益が生じる可能性があるのも、そのあたりまで考えて映像を使わなくてはならない、ということ話を話した。

ディレクターによっては病院のレッドゾーンに入らなければ生の映像が取れないという人もいた。そこは社の方針を説明し、理解してもらうことが何度かあった。

系列局のキャスターが感染したこともあり、他系列よりも厳格化して取材した面があった。そのために「なぜ当社はダメか」という意見が現場からあった。(多)

東京に向かう人を取材したが、感染者リスクが高いとの意見もあり、そこまでやらなくなったり、不特定多数の大人数の取材が難しい時期もあった。担当記者から「向こうがOKなのに」と、かなり食い下がられたことがあった。(少)

<コミュニケーション、現場を尊重>

どちらかという正しく怖がっていた人間が多いと受けて止めている。沿岸部に一人で記者とカメラを兼ねる人間がいるが、その人からは、大きな不安を感じるとの意見がたびたびあった。テレビ局が来ると大ごとになり、それがどのように映されるかが大きい。また、カメラマンからインタビューの際の距離感に恐怖を感じているとの意見があり、ミーティングの時に吸い上げ、その対応策をきちんと取った。(少)

拒否など、記者の意思は尊重した。表立って絶対取材したくない、という激しいものはなかったと思うが、取材に対してネガティブな反応を持つ者に無理はさせなかつ

た。

カメラマンからどこまでやっていいのか、どこまで近づいていいのか分からないとの声があった。少しでもリスクを主張してきたカメラマンに対しては、無理をしなくていいと説明した。

われわれは本社にいて、現場には現場の意見もあるので、もしも現場に違和感や他社に比べて突出している部分がある場合は、デスクの指示を待たずに現場で引いてもらって構わないと話すなど、現場の意見を尊重した。

それによって取材で出遅れる部分もあったと思うが、それについては問題ないとして、コミュニケーションしてきた。(多)

2020年2月から取材班をA、Bの2班に分けて運用した。接触率を下げる意味では部員の意識が共有できた。感染者が片方から出ても生き残り、影響なく動ける。そうした動きに向けての意思統一はできていた。(多)

考え方がそれぞれ違い、取材に行く、行かないで二の足を踏むスタッフもいた。その部分の調整はだいぶあった。強制しないのが原則だった。

感染が広がると、取材先から来ないでくれ、と言われることが増えてきた。それを現場が受け止める。一方で指示する側は「行けないの？」となり、現場と本社にいる人間で齟齬ができる場面があり難しかった。基本的には現場の判断を尊重した。(多)

<対立・齟齬はなかった>

チーム内で「取材に行きたくない」といったことは特にはなかった。感染の不安があるような場所の取材はなかなかないため、部内でそこには行きたくない、そこに行くべきではないとはならなかった。一方で感染のリスクを考え、感染者を収容した病院などは外観などを取る形とし、基本的にあまり近づかないこととした。(少)

チーム内の対立はなかった。感染拡大が収まりつつある時は、ちゃんと取材しなければならぬね、という意見も出た。また、病院の密着取材も敢行し、ローカルでも取り上げた。その際は取材前の抗原検査が定番になっている。費用負担も発生するが対応している。(少)

取材の記者の反応について、当社の場合はそれほどオーバーに気にする記者もおらず、可能な範囲で取材しようと進め、大きく意見が変わることはなかった。(多)

今、視聴者が知りたいこと、例えば医療の現場で何が起きているかをできる範囲で取材するしかないという雰囲気だった。そこでの齟齬はなかった。

ただし、感染対策はこれまでの取材方法を引きずった面があり、映像を見るとマスクをしない状況で聞く、距離が近いなど、感覚的にできていないこともあった。ストレートニュースよりも特集や企画もの、コロナと関係ないもので徹底されていなかった。こういうことは止めようと継続的に注意を呼びかけていた。(多)

時代というか、一昔前ならば報道機関であるという、取材の制限を飛び越え、もっと突っ込んだ取材をするべきとの議論があったかと思うが、今は、映像において無理な画面構成が見えてしまうと視聴者が敏感に反応してしまう。そのことをデスクや現場の記者も十分分かっている。そうした危険を冒し「あなたたちが現場に入ったことで感染リスクを広げているのではないか」という見え方への恐れはコンセンサスとしてあった。そこを踏み越えて、メディア、ジャーナリズムだから行くべきだ、という議論については、今もそうした話にはならなかった。

腹を割って話せば不安を抱えた記者もいるかもしれないが、危なくて行きたくない、ということもあまりなかった。(多)

⑥ 人員不足等による取材活動の難しさ

コロナ禍の人員面について話を聞いた。各社とも2班に分けたことにより、コミュニケーションなどに齟齬や苦慮があったようだが、少ないなりに効率的に取材を進めた様子が伺えた。また、リモート取材を活用した社も目立った。さらに、取材の優先順位を厳しく決める、取材対象の減少によりニュース枠の縮小を検討した、などの意見も。他方、地元自治体の記者会見に毎日行く必要があり、長時間労働を強いられたとの意見と人員面で困ったことはないとの意見の両論があり、いずれも地域の感染者数や会社規模とは関連性はみられなかった。

<2班体制で腐心>

キー局と違い、人数がいるわけではないので、壊滅的な被害を受けて放送できなくなることも想定した。すべての番組でそうならないようにしたが、こと報道は止めるわけにはいかない。グループを2班に完全に分け、デスクも記者もディレクターも週で半分に割って放送体制を整えた。その間は本社にいないチームが直行直帰で取材を行い、自宅で仕込みや調べ物をした。どうしても最初は慣れなくて、コミュニケーションが電話等になった。

外に行くと余計に頑張ってしまう、放送尺がないなどさじ加減に苦勞した。慣れてくればそれなりに機能したと思う。(多)

2020年2月からA、B班の2班に分けて運用。緊急事態宣言中に片方の班は自宅待機となった。したがって実働は半分になる。一日交替で勤務し、実働部隊となる片方の班のバックアップを別の班が電話で行う形でのいだ。

自宅待機で電話取材だけをしている担当には、どうしても無理なことがある。「会見にカメラを持っていきたい」「ほかの班との接触はないから、記者会見に行っていっか」などと言われ、ハンドリングが難しかった。そこまで求めていないから、ここは一步引いて行くのは止めようと抑える時もあったが、“他のスタッフとの接触はなく撮影だけ”など都度判断もあり、そこは難しかった。(多)

<リモートを活用>

一回だけ保健所から連絡があり、(スタッフが)濃厚接触者に当たるので、検査を受けてください、ということがあった。アナウンサーとカメラマンがその対象となり急ぎょ休みに。人繰りがいきなり苦しくなったが、少ない中でうまく回していた。逆にリモートインタビューを撮っても違和感がなくなったので、それを活用した。(少)

かなり大変だった。2020年の春に2班に分けた。難しかったのは意思疎通。1班は社内、1班は外という中で片方の班にVTRを託すというスタイルだったが、確認作業が煩雑になり、取材相手の顔出しなどでトラブルがあった。

一方で、取材の効率化に関し、リモートでできる部分の発見があった。コロナに教えられたプラスの面だ。

人繰りがきつい時にローカルの枠を縮小し、全国ニュースに乗ったこともあった。2020年の春から夏はそれで乗り切った。(少)

他社の意見も聞きながら取材していた。他社では2班に分けて班同士が接触しないよう交互に取材活動をしていたが、当社はできなかったもので、単純に外での取材を減らすのが一番、ということになった。ニュースの枠を減らすことはなかった。外には行かずリモートでつないで取材やインタビューをするなど可能な限り対応し、人数のカバーをした。(多)

<できることを模索>

報道スタッフの中に同居家族が感染したり、濃厚接触の疑いが出たことなどが相次いだ時期があった。ニュース番組は作らなければならない。その場合、VTR制作が一番負担がかかるので、スタジオのコメンテーターのトークの面積を増やすなど、少人数でも回していける形で対応した。

必要な取材には行ったが、ふだんよりもよりその優先順位を厳しく決めた。どうしても手が回らない、ということにはなかった。ただし、これはやっておけばよかったということはあった。(多)

取材先からあまり来ないでくれと言われてたり、イベントも激減すると結果的に取材項目も減る。どうやって枠を埋めようかと、枠を縮小することも含め検討した時期もあった。感染流行の第1波を通じてある程度方法論ができた。夏に一度、第1波が収まったところで整理した。(多)

<その他>

放送エリアの自治体内でコロナの感染者が出ると、その発表を受けて報道するが、1日の集計が終わった後、感染者が出た場合に発表は夕刻になる。当初は会見が22時、23時などになることが続いた。それまでデスクが連絡を待ち、夜の会見の指示を出すことが放送エリア内で初の感染確認が出て以降しばらくあり、長時間労働を強い

られた。

毎日、地元自治体が時間を割いてブリーフィングを行う。カメラの制限もかけられたので、放送エリア内のテレビ局で会見をプールし、映像をスルーで送るようにしたので、カメラマンは回せた。ただし、記者は毎日会見に行ったので、そこに人員を投入しなければならない。他の取材は記者とカメラを兼ねてもらったりなど、きちんとクルーが組めない時があった。(少)

報道の人員は充実している、感染者が1人出たくらいで濃厚接触者も関係者のみ。人員不足は参院選の時期よりは問題なかった。

感染対策として2チーム体制を(このインタビューの)2週間前まで取っていた。そのわずらわしさや特別な感じはあった。(少)

直接的な人員不足で取材しにくかったり、取材できないことはなかった。

取材時の感染対策マニュアルをしっかり持っており、日常生活と同じレベルの感染リスクの範囲内で取材をしていたので、それを恐れて取材をしないとすると、われわれの職業が成り立たないことを記者個人は理解し、日々業務に励んでいるはずなので、この現場は怖いから行きたくないという話はなかった。

感染拡大がピークだった時は、社内でA班、B班を作り、出勤日を分けたが、接触しないようにすることまでは行っていなかった。代わりに報道フロアと違う場所に待機場所を作った。(多)

テレビの報道には、朝出社して会話を交わし、昼や夕方はこういうニュースを作っていこう、というところや、ここまでにこういうものを撮りたい、という面がある。当然予定どおり撮れない時もある。さらに本来ならもう少し落ち着いた取材をしたほうがいい時、今日の放送に向けてある程度取材を進めていく時もある。そういう面でこの取材を今日すべきだったのかどうか、といった反省はあったかもしれない。

当時は日々、状況が変わっていった。ニュースバリューや視聴者が知りたいことを取材をするとの認識のもとで進めてきたが、そこに安全や感染防止という観点があったかどうか、われわれとしても考えていかなければならない。(多)

⑦ コロナに関する知識のアップデート

コロナ禍において「デルタ株」をはじめ、新しい情報や用語が登場し、日々の活動の中で知識をアップデートする難しさがあった。各社がその知識を得るためのよすがとなったのは、地元のウイルス・感染症学の専門家や、自治体・行政機関のブリーフィングなど。

また、新しい用語などに関しては系列のルールなども機能している。一方、部員がそれぞれ勉強する、コロナの取材を担当する記者が他の記者に伝える、記者の情報を共有するなど、記者間の情報共有の事例も多く聞かれている。

<地元の専門家から>

未知のウイルスであり、軽々なことが言えない。幸い地元放送エリアにウイルスの専門家の先生がいて、夕方のベルト番組でほぼ毎日出演を依頼していた。その2人に都合をつけてもらい、解説していただいたり、分からないことを聞いていた。われわれが提示するVTRや原稿も先生に意見を聞くこともでき、その点はありがたく、専門家が身近にいることは大きかった。(多)

地元で感染学の先生が何人もいて、新しい情報が出れば、その都度先生に聞いたりした。

最初、当社の系列はデルタ株を「インド株」と使っていた。インドという地名を使い続けていいのかという議論があり、専門家の意見を聞いた。その後、当社の系列はデルタ株に統一されていった。そうした点も含め、随時専門家にどう取り上げたいか、この数値は報道としてどう説明すればいいか、節目ごとに聞いてはいた。(多)

用語もそうだが、聞く先生によって意見が異なる部分が多々あった。記者の自分の判断ではなく、難しいところは専門家のインタビューを取るようにと指示した。いろいろな先生にあたって、どの先生が分かりやすく、正確な形で伝えてくれるか、かなり試行錯誤があった。(多)

<自治体や行政機関の情報>

不勉強の部分は怖い。厚労省のアドバイザリーレポートや、政府の専門家会議後のブリーフィング、勉強会的な機会など公的なものは、ふだん放送するうえで見てきたし、勉強もした。それと同時にオフのブリーフィングなど専門家と話す機会もあった。現状の見通しもさることながら、今後の見通しやどうした点に注意するのか、最初のころならば実効再生産数などどういった点に注目すべきか、専門家から話を聞き理解していった。付け焼刃だったかもしれないが、報道するうえで気にしていた。(多)

地元自治体が毎日のようにレクを開いており、記者会見を通じて知見や知識を得ていた。それらを共有し、地元自治体のリリースを信じながら取材を行っていた。

オンラインでのデスク会議などで担当デスクの考え方が共有できていた。(少)

<系列からの情報>

知見や用語の使い方は基本的に系列のキー局に従った。病気の内容やリスク、原稿上の表現を組織で共有。新たな知見をあらためて組織内で意識的に勉強することはなかった。

それでも足りず、補足が必要な場合に地元のウイルスや感染症の専門家に取材したことはあった。(多)

インド株とするかデルタ株とするかなどは、系列から統一した呼び方や表記、字幕にする際のルールがすぐ出てきたので部員と共有。混乱をきたすことはなかった。視

聴者に少し戸惑いがあったのは、政府が職域接種を、と言っていたのを当社系列は「職場接種」と表記、アナウンスすることになっていた点。なぜ職場なの、という問い合わせがあったが、系列のルールに則った。

地元自治体の発表の伝え方、特に言葉の使い方で当初から細かい注意喚起をした。誤解や中傷につながることを避けるためだ。マスコミには影響力があるので、1つ1つの用語にナーバスになるようにと、部員に浸透させるべく、口を酸っぱくして言った。陽性者と感染者の使い分けや正しくない区分など、誤解を招くような言い方、受けとられ方を避けようとの意味があった。原稿をチェックして直し、1つ1つ部員に説明していった。今はすべての部員に浸透している。(少)

用語・呼び方については、キー局から「デルタ株」などはこうしてください、という情報が早めにアップデートされてくるので、それをニュース終わりにスタッフが集まる会でその都度話し、デスク間で必ず共有。言葉に気を付けていた。(少)

新しい用語はキー局から「こういう表現をする」との通知が来た。(少)

<記者が得た情報を共有>

基本は各部員個人が各メディアの情報を読んで勉強してください、というところだった。当社は通信社に加盟しており、例えばインド株を「デルタ株」とするなど、ある程度書き方の説明があり、それに準じていた。医療関係の言葉は、医療部や医療担当、科学担当がいないので、通信社の書き方をベースにして対応していた。(多)

(インタビューの) 数カ月前までコロナの担当をしていた記者がいて、その記者が専門的に新しい情報を積み重ね、その情報を他の記者にも伝える形を取っていた。

その記者はもともと行政担当で、地元自治体の動きを追いながら、専門家会議など行政の動きをチェックしていくなかで自然にそうになっていき、有識者などの人脈もつなげ、取材を組み立てていった。チームとして動けておらず、その記者に頼り切ってしまった。そこがこれからの課題だ。(多)

正直難しかった。デスクとしても言葉についていけない。その使い方や認識が合っているのか不安を抱えながら業務を行っていた。

そうした中でも数字の比較や、過去何番目の数なのか、厚生労働関係の当局はどういう概念でいるのかなどは、記者から上がった情報を共有し、そのためのシステムを作っていた。ある程度、何かあったときに確認するよりどころはできていた。

また、キー局にも言葉の使い方などを確認していた。

地元の医師会や感染症の専門家が定期的にレクチャーを開いてくれた。取材はできないが、医療の現場も含めて参加してくださいと呼びかけがあり、今の状況や認識をレクチャーしてくれた。そうした場に出席することで、アップデートすることができた。(多)

(2) 報道に関して悩んだこと

① 社会不安をあおらないために

各社とも社会不安をあおらないような報道に腐心していた。その基本となるのが事実を伝えるということ。自らが自粛警察的に感じる報道は止める、差別が起きていればその解消に努める、断定的な表現を避けた、などの意見があった。一方で、明るいニュースが出しにくかった、日々の起こることを伝えるので精いっぱいだったなど、率直な意見も聞かれた。

また、感染者数などをめぐる意見も多かった。発表の速さを競う流れに疑問を感じた、センセーショナルな数字は止める、数字を伝えるだけにとどめたなど、その伝え方に苦心した様子が見えられた。

<バランスに腐心>

不安をあおるようなもの、そうした声はインターネットなどで当然聞こえていたが、事実だけをしっかり伝え、自粛警察的にわれわれを感じるような報道は止めようと話していた。

例えば、(自治体が自粛を要請するより前の) 時間内に居酒屋を取材し「混んでますね」というのは悪いことではない。われわれが正義の鉄拳を振りかざすようなリポート取材は落としたり、そもそも止めよう、という話はした記憶がある。

事実は伝えなければならないが、人間なので気が滅入っていく。コロナの報道はしなければならないが、コロナ禍だけど温かい取り組みも始まっていた。例えばお弁当屋が頑張っている、家族でこんなことが楽しめるなど、明るい気持ちになれるニュースも入れるよという話をしていたし、意図的に伝えていた。その根本はスタッフとの会話で、「気が滅入っちゃうよね」といった話があった。また、家族からも「コロナばかりで見たくないよ、暗くなるよ」と言われ、出演者と「コロナしかない」などと会話をしている中で「こんないい話もあるね」といった意見も挙がった。

餃子のチェーン店が廃棄するものを医療機関に届けるという、心温まる企画を上げる記者やディレクターが出てきて、方針としてもこうした話題を入れたいと伝えた。誰が決めたとか、その基準を設けたり、必ず1日1本入れる、ということでもなく、なるべくこうした話題を入れていこうという合意形成ができていった。(多)

いたずらに不安をあおりたくないと言いたいが、一方で事実は事実として伝えたいという思いもある。当社のエリアは地元自治体がしっかり対策したほうだと思う。そこで地元自治体のやり方を参考に、差別が起きているという発信があれば、それをどうなくすかという取材に切り替えたり、自粛すべきとなれば、そうした論調にした。感染はある程度抑えられていたので、信じてよかったと思う。(少)

コロナの情報は、特に事実関係を重視して報道していた。何かあおるような取材は

ほとんどしなかった。例えば自粛要請に従っていない店を紹介してもそれに対する声を出すことなどはしない。視聴者からの反響も特になかった。

クラスターの発生に関しては、何人が感染しクラスターの恐れがあると機関が発表した、という内容を口頭で報じた。(多)

コロナの問題には色々な意見がある。どちらが間違っているとも言えないし、完全に正しいとも言えない。どうバランスを取るのか、一方に偏りすぎないことを常に頭の中に置いていた。

例えば、原稿の末尾を断定しない、こういう意見もある、こういう考え方もある、といった言葉を原稿の中で多用した。(多)

そこまでヒステリックで過剰な反応が寄せられることはなかった。

見え方で心理的に引っ張らないよう、ミスリードしない映像作りを意識していた。

例えばワクチンに黒いゴム片が混入した問題が発覚したが、当社の放送エリアでも早い段階で見つかった。その時に回収対象となったワクチンを接種した患者がいて、亡くなったという報道があった。それを報じるかどうか。明確に関係しているとは言えないと専門家も言っていた。報じてしまうと関係があると見えてしまう。ワクチン接種の初期の段階だったので、結果的には出さなかった。十分伝えるには情報があまりにも少なく、検討の末に判断した結果だった。(多)

本当は多様なニュースを出したいと思っているが、コロナに関する報道が増えると明るいニュースが出しづらく、専門家もいつ頃解消するかの見解を出しにくい。地元ではコロナからの復帰を願い、各所でイベントが企画されていたが、クレームを寄せてくる視聴者もいる。自粛期間はクレームがとても多かった。視聴者との温度感をどう同じにするかに一番苦労した。

系列のコメンテーターの発言に関し、同じチャンネルで見ている中、オリンピックの報道などで「手のひら返しではないか」といった意見もあるようだ。系列に激しめの発言をするコメンテーターを使った番組があったようで、当社の夕方の番組に意見が寄せられてはいた。それに対しては、自分たちの番組ではこうだ、と取材結果を愚直に出していくしかないと考え、地道に伝えていった。

オリンピックの伝え方も難しかった。アスリートにはオリンピックにかける熱意がある。単純にオリンピックというイベントではなく、われわれはそうしたアスリートの熱意を前面に出してオリンピック報道に入っていた。実際難しかったが。(多)

過去の経験や知識が全く参考にならない全く新しい病気だったので、日々起こることを取材し、伝えることで精いっぱいだった。振り返ってもどれが行き過ぎで、行き過ぎでなかったのかどうか。自粛警察などの報道もあったかもしれないが、今、どこが難しかったかは一言では言えない。(多)

<感染者数・感染者の伝え方>

地元のメディアは特に、当日の感染者数の公表の速さを競うところがあった。数字だけ出しても地元視聴者に何の意味があるのかという思いがあり、意味がないのではないかと感じながらも、社内では速さを求めてくる人もいたので、考え方に苦労した。報道として、感染者〇人というネットニュースの一行に意味があるのか。いまだに悩んでいる。

従業員が感染するとウェブサイトで公表する会社があった。その代表に後日インタビュー取材して、意図を聞いたが、隠すよりも公表したほうがより従業員を守れるという話だった。地元の自治体は狭いので、名前を出さないことでかえって誰が感染したなどうわさが広まる。その特集を組んだ時は反響があった。当社の営業からも好感触だった。感染が悪ではなく、誹謗中傷を守る意味で公表という手段があるということニュースで紹介できたのは、よかったと思う。感染者数は東京のようにはならず、多くても二十数人で、100人になることはない。地元にいるとどこの誰という話が漏れ伝わり、うそのうわさが生まれ、その学校の生徒が退学になるなど、悪い方向に広がることがあった。そういう意味でも先の企業の代表へのインタビューはやってよかったと思う。(少)

冷静に対処しよう、数字だけに踊らされるようなセンセーショナルな報道は止めていこう、となった。感染者数が倍々ゲームになるようなところもあったが、あまりあおったりしないようにし、感染者が減っていき、好転していく部分はしっかり報じた。少しでも前向きになってほしいという面もあり、いい情報はしっかり伝えていこうという話をした。(多)

携帯電話を使った流動人口データにより、人出が増えた／減った、という情報を当社も放送しているが、数字だけを正直に伝えることに止めた。これに関するインタビューでも「これだけ普通に感染者が減っているのだから街に出た」「出てきたがすぐに家に帰ろう思っている」という両方の意見を伝え、バランスを取るよう配慮した。

田舎でクラスターが発生したことを報道すると、視聴者から「地域全体が不安に陥るがどうなのでしょう」といった意見が1、2件あった。行政のほうで施設名を発表する／しないがあり、施設名が出せない時もあったが、地元自治体の発表に準じている。(多)

地元の感染者がゼロであると大きく報道することは地元メディアはしなかった。なぜ感染者がいらないのか、という観点で取材する局があり、代わりに取材しなければならないこともあったが、われわれはゼロであることが続いていることを神格化や、クローズアップする報道はしなかった。街で声を聞くと「他県から人が来ると怖い」「県外ナンバーを見ると避けてしまう」など、受け入れたくないという心情が高まっているのを感じていた。しかしそれが差別につながると思った。それを報道することで、

差別を生む危険性もはらんでいたもので、ことさらそこを強調する取材は避けようと考えた。(少)

あおらないようには心がけた。ただし、感染者数など数字を伝える報道に偏りつつあったことは反省。今でも新規感染者に一喜一憂している。ただ、人数は視聴者の関心事なので出していた。(少)

② プライバシー／被取材者が差別の対象になること、感染者に対する誹謗への配慮

感染者や取材対象のプライバシーへの配慮を行ったうえで、どこまで報道するかのジレンマに悩んだ様子が見えられた。そのうえで、伝えるべきものを伝える、困っている人を伝える、などの考え方やそのための取り組みも吐露されている。他方、自治体などから感染者の個人名が出なかったり、その情報が有用でない例、特に感染者の少なく、人口も少ない放送エリアにおいて、行動履歴を出すことで対象者が判明してしまう、あるいは、学校名の公表に気を使った、などの事例がみられた。

インタビューでは、帰省などで都市部から人が入ってきた場合や、観光地などを抱える地元で観光客が入ってくることにしても尋ねた。取材相手とコミュニケーションを取る、来た目的や事情をしっかりと伝える、などの意見があった一方で、他県ナンバーの車を映さない、観光客をアップで取らないなど配慮した場合もあったようだ。

<感染者や当人への配慮>

基本的に感染した人は報じていない。本人が主張したいことについて、取材に応じた場合はそれを伝えたが、一般人で感染者やかつて発症した人は匿名とし、顔も出さないなどプライバシーにかなり配慮して放送した。(多)

個人的にはモザイクをかけたくないが、第5波のときは、できるだけ顔を放送しないようにすると決めた。2021年に入ってから時は短営業内でもそうしている。悪くない話だからいいという考えもあったが、変な見られ方をするのもよくないとして、当人への配慮からそうするようになった。(少)

コロナに感染した人の差別はあってはならない。感染した人のインタビューを撮る際、先方から顔を隠し、声を変えてほしいとの要望があり、その形で流すと、メディア自身が差別を認めたようなものだという意識があり、やりながら難しさを感じた。

緊急事態宣言時は、県をまたぐ移動も止めようとのことだったが、行楽地でインタビューをすると県外の人もおおり、そのインタビューは極力使わないようにした。

緊急事態宣言が解かれたとはいえ、人が集まるような場所や観光地に出ていて密になっている映像は出しづらかった。また、マスクをせずに町中を歩く人も出しにくい。そうした映像をどこまで出すかは毎回議論していた。街中で込み合っている状況の映像はマスクをしているほうが使いやすい。屋外においてマスクを外してもいい距離を国が示している。国の基準以外に当社の独自基準は作りづらい。何か言われた時

の理由付けは必要だと感じていた。(多)

感染初期にスポーツクラブでの感染が増えたが、そこに通っている人からスポーツクラブばかりが悪いととらえているとの匿名の意見があった。(多)

放送エリアでも病院などでクラスターが発生。その起きたところで、名前を出すかどうか悩みはしたが、他社が出していたということもあるし、そこで起きていること自体、場所を出す意味があると考えた。地域の人分かっている。そのバランスを考え、名前は特に医療機関だとしっかり出した。なぜそれが起きているかを検証することが必要だ。病院側も隠したりや、そうした要請もなかった。その判断の際の対抗材料はなかった。(多)

地元エリアは感染者の数がどっと増え、あっという間に広がり、なかなか感染者が出ないような事態ではなく、ある程度出たら(状況に)慣れていくというところがあった。初期のころ、かかってしまうのは仕方がない、誰でもかかることがありうるということを原稿に必ず入れていた。(多)

今、何を伝えるべきかを抽出するのに苦労した。自宅療養者が増えている時に現状を取材したり、実際に家を回って治療している医師に密着するなど、時々に応じて、困っている人を見えるようにするにはどうしたらいいかを考えた。なるべくビビットに伝えなければと、対象を探し取材した。

どうしても継続取材ができていない部分もあったし、感染の後遺症に苦しんでいる人もいる。困っている人の声でもっと伝えるべきものがあるのではないかと個人的には思っている。(多)

<公表された情報に苦慮>

基本的に行政はすべて匿名でしか発表せず、つかみようがなかった。当初は今より厳しく、男女を言わないところから始まった。

施設に関しては市町村が発表していなくても学校等が自分たちで発表するなど、考え方に違いがあった。見え方がバラバラになるので、途中で行政の発表に基づくほうがいいとし、公表していれば公表することとした。当事者が出していても、出さない時もある。今もそうだ。

行政の情報公開について、最初は情報になっていなかった。会見でもマスコミとやり取りがあった。特にガードが固い自治体があったが、この辺までは出しているといふと徐々に慣れてきて、さじ加減が分かってきたようだ。毎日扱うからこそ、ここまで出さないと記事にならないなどと線引きができた。現在は困っていない。最初は性別や年代、国籍などの公表もなく、お互いに苦労した。

一方で、情報として意味があるのかというのがある。放送エリアではクラスターなどの発生に関し、地方ごとに発表されるが、広い区域となり、その中でクラスターが

起きたと伝えても気をつけようがない。広い地域がゆえに分からない情報を提供がどこまで有用なのか、悩んだこともあった。(多)

個人が特定されないように気を付けたが、エリアによっては人口の少ない自治体もある。性別や年齢とともに行動履歴も発表され、それを報じるので、おのずとそのエリアでは（感染者が）分かってしまい、ジレンマがあった。1人の感染者からさらに広がることを避けるためにはやむを得ないというところもあり、実名報道はしていないものの、行動履歴を報じることは当事者にとっては苦痛だったと思う。

クラスターが発生した飲食店は、感染拡大の可能性をはらんでおり、影響が大きいことから店舗や店主取材をした。利用客が多かった飲食店も地元自治体に従い店名を公表し店舗も撮影した。影響力の大きいところは公表した。

田舎ならではの困ったこともあった。ある理容店での感染例を地元自治体が公表したが、あまりにもエリアが小さく、個人が営む店舗なので、誹謗中傷がひどかったという。親族からなぜ公表したのかとの抗議があり私が受けただけで2件あった。学校に行けなくなったなどの抗議や、生活できないなどの苦情を受け、心労にもなった。

地元自治体内でも都市部と地方都市で温度差や差別があった。中心部からはお断りなどとは何度も言われた。

地元自治体や保険所がクラスター発生と公表しても、実名を報道するか否かは、慎重にジャッジした。判断するうえで関係する人数が多く、疫学的に公表する必要性があるところは公表したが、エリア内の感染が拡大してからは、事業所などがホームページなどで自ら公表していたので、そこにかぶせる必要がないと判断した。私たちが伝えるべきは、さらに感染を広めないということへの注意喚起だと考え、クローズアップすることは避けた。(少)

学校名の公表に関し、父兄は気にしていて、会社まで文句を言いに来た人もいた。病院名などは自分たちもウェブサイトですぐに公表するが、学校だけが特別で大変気を使っている。

患者のインタビューについては、顔や名前は出してほしくないという本人の意向があったので、それは避け、音声も変えた。提供してもらった宿泊療養施設の写真を活用しながら、感染した時の症状や、宿泊療養施設での生活などを中心にインタビューした。(少)

<観光地を抱えたエリアの対応>

サーフィンが盛んなエリアに県外ナンバーの車が止まっているのを取材する際、記者も相手の反応を気にした。コミュニケーションを取ったうえで、あなたが悪いわけではないと説明し、取材交渉した。断られたことはあまりなかった。確認し、顔までいいよとなれば映し、放送はいいがネットは止めてくれ、というときは当方も煩雑に

なるので、最初から首から下にするなど対応した。(多)

地元観光地を抱えており、感染が収まったところから観光客が増えている。取材をして伝えているが、放送エリア外から来ていることに対する問い合わせはなかった。お店の人にインタビューしても「一気に来て怖い」という声はあるが、経済活動を成り立たせなければいけないというところもあり、合理的にとらえているなどは思う。観光地の状況などは、フラットに伝えるべきものではないか。(少)

観光地の取材で、この状況下においても来ている人のインタビューをしていた。時間が経つにつれて、差別的な反応が示されるようなところもあった。途中からは「観光地の人通りが少なくなった、影響を受けた」旨の取材は行っていたが、他の自治体のナンバーの車を映さない、観光している人をアップで撮らないなどの対応をした。

内容も観光地で仕事をしている人の声や、受け入れる側の悩みなどにシフトさせた。(多)

東京から来た観光客に対する攻撃的な意見などがあつたかもしれない。明確に否定しなくても、観光客が来るから感染者が増えている、との声があつた。直接的に掘り下げたことはなかったが、観光客が増えている時は例年通り伝えた。許可を得てない時は足元だけにして、インタビューも顔を出さないなど映像に配慮した。取材がOKな人も自粛要請もあつたので、遊びに来たことを声高に言っている映像ではなく、チケットを取ってしまったからなど、目的や事情が伝わるようにした。(多)

③ 感染者数の報道について

地元自治体が発表する感染者数を報じることについて、考え方を尋ねた。感染者数が最大の材料であり、感染拡大の抑止力になったとの意見や、一番の指標になり、増えれば警鐘につながったなど、伝えることの意味を強調する意見が目立った。一方で伝えることのジレンマを吐露する声もあつた。

インタビューは感染者数が収まってきた時期に当たっていたこともあり、今後も感染者数を伝え続けるかを尋ねた。これに対しては検討を始めている、あるいは迷っているとの声も多かつた。一方で、「推移としては分かりやすい数字なので続ける」「いろいろな所に波及するデータなので当面は出さざるを得ない」といった意見も根強かつた。

<必要だった>

感染確認の数は、少なくともそれが報じる最大の材料だった。地元は病院のひっ迫ではなく、病床使用率なども伝えていたが、感染確認の人数がすべてのベースになっていた。発表どおり、毎日地元自治体が出す数字をもとに構築。感染拡大の抑止力になった気がする。

数字を出さないことへの問い合わせ、関心はある。どこのエリア、市町村、保健所の管内なのか、発表がないと逆に不安をあおる現象も起きている。(少)

毎日の感染者数は一番の指標になる。増えれば警鐘につながるのではないかと信じ、毎日伝えていた。これからどういったニュースを伝えるかの指標にするためにも毎日の感染者数の増減には一番注目していた。(多)

<あおっていた/その他>

人に直あたりし、人を描くことが難しかった。そのために、日々の発表や数字に頼った部分があったのではないかと、ということは日々考えている。感染者数をこれまで通り伝え続けるのか。国が示す基準にするのか、施策を取る地元自治体や地元政令市の基準を使うのか。時期によって変わり、地元自治体が独自の警報を出すことがある中、何を出すかは日々変わっていった。(多)

病床数も死亡者数も毎日全部出しており、(視聴者からの)「隠しているのでは」という意見は解消している。(少)

東京の感染者数を地元各社が速報で出していたが、当社でも意味があるのか、という議論があった。新規感染者数に加え、重症者数、病床のひっ迫率やステージなど、情報量は多いものの毎日出すようにしていた。(多)

ジレンマがあった。病床の状況や療養者の数、その推移や地元自治体が定めた警戒レベルのどのステージにあるのか、変化しているのかなどの情報を盛り込むようにした。そこで大きな変化があった場合は、それを原稿の前のほうに持ってきて、ここがニュースなんだということを強調するようにした。(多)

感染者の数自体が欧米と比べて桁が違う中で、その数字を日々出すことで不安をあおっていたのではないかと、ということは今振り返ればあったかと思う。批判がある一方、数字を日々出すことで視聴者一人ひとりが日常の生活で気を付けるうえでの注意喚起にはなっていたと思う。(多)

<感染者数の報道 継続の考え>

今後、医療の状況をしっかり伝えたい。感染が再拡大した場合は、病床のひっ迫状況などが判断材料になるので、そのことの重要度がより増すと思う。現状はまだ、医療もひっ迫していないが、この段階で切り替えることは、今の段階ではない。(多)

エリア内で感染者数ゼロ人が続いていることを出すのは悩ましいが、安心情報という意味では、出さないという考えはない。議論はあるが、推移としては分かりやすい数字なので、続ける。(少)

感染が収まり、現在は新規感染者数に絞っているが、視聴者の需要はあると感じている。切り替えのタイミングは難しい。新規感染者数は直近の広がり具合が一番分かり、いろいろなところに波及するデータだと思うので、当面は出さざるを得ない。(多)

切り替えのタイミングは難しい。感染者数の報道を止めるという議論も出ていな

い。そのまま続けると思う。(多)

<止める／迷い・検討中>

感染が落ち着いてからは、東京および地元の感染者数を毎日必ず出すことをルーティーンにはしなくなっている。(多)

減ってきたからやらなくていいわけでもないし、減ってきたからこそ何ができるのか、日々模索している。これから年末年始に向けて、解除になってもこういうことに注意しなければならない、ということの報道はできるが、それ以上で何ができるのか。後遺症や、ワクチンの3回目の接種など、第6波に向けた準備がどこまで進んでいるか、伝えていかなければいけないと思う。

ピークの時期に比べ、目に見えた動きがあるわけではないので、苦勞しながらやっているが、報道する面積が減るのは如何ともしがたく、その中で感染者数の話は難しい。視聴者の日々の会話で中心となっており、伝えないわけにはいかない部分がある。(多)

視聴者から問い合わせが来るくらい日常になっており、いつ止めるのか、どうすればいいのか正直分からない。(少)

地元自治体内の感染者数が減ってきており、最初はトップニュースで伝えていたが、ここ1カ月はトップではなくなり、感染者がゼロになったというニュースを一応続けているが、止められない。ゼロならば必要ないのではないか、という議論はしている。(少)

新規感染者数がベースになっているが、今後についてまさに議論しているところ。その数が減ってきている中、死者の数をメインで伝えたほうがいいのか、議論している。例えば3日に一度にするなど、簡素化してもいいと思う。地元自治体のレク自体も開かれず、クラスターも1日1件あるかないかのレベル。視聴者からは市町村ごとの感染者数を伝えてほしいという意見がいまだにある。(多)

(感染者数を伝え続けるのかという) 具体の議論はない。地元自治体は感染者数ゼロ人が続いた。このことは、この状況では伝えるべきこととして伝えた。(少)

④ 政府・自治体の対応の伝え方・政策批判とのバランス

報道する上での政府や行政への批判と報道バランスについて尋ねた。

「政治的な意味があるのかどうかではなく、感染対策上必要な情報であるかどうかを考えた」といった考えが示されている。政府の対応について、首長にインタビューを行うなどの取り組みがなされている。一方、知事の軽率な発言などが話題となったが、切り取らず伝えたなどの事例が聞かれた。

一方、行政の施策に関し、批判的な声を伝えることも必要、視聴者の目線を入れる、といった声も。行政の情報公開に関しては、不満を訴える意見もあった。

<知事の発言等について>

地元自治体が独自の対策を打ち出していたが、政治的な意味があるのかどうかではなく、感染対策上必要な情報であるかどうかを考えた。例えば地元に医療施設を作るという話が出た時には、病床ひっ迫の中でその対策は有用だと判断。知事の発言をそのまま出した。他方、政府や与野党の批判など、政争の具となることに利用されないよう意識したうえで放送していた。(多)

地元政令指定都市の市長と知事の折り合いが悪いが、知事にはより素早く対応することがどの局面でも求められる。国が緊急事態宣言を出す中どう考えているのか、個別のインタビューを申し込んだこともあった。(多)

地元知事が早めの対応を打ち出していた。評価する声もあり、国に対してもっと働きかけたほうがいいのではないかと、といった質問もでき、他の自治体に先んじて手を打っていることを伝えることができた。付度やバランスという部分では選挙もなかったもので、あまり苦労しなかったし、意図的に持ち上げる必要も、貶める必要もなかった。いい意味でのフラットな関係があった。

一方でヒーロー的に扱う番組や救世主、スター選手のように持ち上げる企画が流れることがあり、苦虫をかむこともあった。(多)

地元の知事が軽率な発言をしたことがあったが、切り取って伝えても始まらない。新聞やワイドショーのネタになったが、まったく取り上げないわけにもいかず、問題を淡々と伝えなければならない。知事の言い分を切らずに伝えた。地元では観光が基幹産業なので、そこを憂慮しての発言ではあった。(少)

知事のキャラクターもあり、脇が甘く、不穏当発言もあったが、(感染状況に関する)数字自体で恣意的に何かしているという雰囲気はなかった。ただし、出している数字が十分でなく、数字で語れるものが自治体から出てこないことがあった。その場合は感染症の医師に話を聞き、現状の変化をどう見るかなどを入れたり、特集を組んでフォローし、数字だけにしないよう心掛けた。数字だけ見ていると一喜一憂になってしまう。人工心肺装置＝ECMOを使っている患者がいる、病床が足りなくて工事を増やした、といった情報を入れると、医療のひっ迫を出せる。また、折に触れて現場の映像を出すようにしていた。(多)

<政府や自治体の政策の伝え方など>

自宅療養で亡くなった人がいた。そうした方々も医療を公平に受ける権利があった。不公平感を抱いている人や行政への批判はあると思うので、そうした声も伝えるべきだと思う。休業した飲食店も補助金がたらないところ、もらったほうが得するところがあった。そうした不公平感を伝えないと気が付かない部分もある。伝える必要はあったのではないかと。(多)

<p>国の対応よりも地元自治体・市町村の対応をきちんと考えて伝えていた。地元視聴者が迷うようなものはそうした目線を原稿に取り入れるようにした。単純な発表ではない、こういった意味合いを持つのかとの視点を入れて放送していた。(多)</p>
<p>地元自治体は、前日の検査結果を翌日の16時過ぎに発表するので、いつも遅いと思っていた。また、感染者がワクチン接種を行っているのかどうかを絶対に教えてくれず、ブレークスルー感染なのかどうかを伝えたいが、協力してもらえなかった。ワクチン接種の有無に関し「教えてもらえないのか」と尋ねたが「そこまで手が回らない」と言われた。地元の視聴者が知りたいのはそこだといっても聞く耳は持たない。(少)</p>
<p>情報公開の点では、自治体によってクラスターを発表する／しないがあった。夕方ニュースは小さい子どもの視聴者が多い。しかし自治体によって学級閉鎖も発表する／しないがあり、なぜ発表しないのか、ということは取材過程で聞いたことはあった。(多)</p>
<p>地元自治体は出すべき情報は出していた。ただし、独自の事情だが、政令市それぞれが独自に出す情報と県が出す情報との兼ね合いを考えた。意見の対立はなく、連携は取れていたが、県と市の対応が異なり、どちらも見なければならなかった。(多)</p>
<p>(批判的でないと)とらえられてもおかしくないくらい地元自治体を信用している。担当部長や委員らを取材し、いろいろな立場の人がいることもあり、方向性が間違っていないと判断した。(少)</p>
<p>地元自治体の行政対応の不備は目立っていない。政令指定都市とその上の地方公共団体でそれぞれ対策室を持っていたが、行き過ぎた施策などなく、地元経済界や観光業界からも政策・行政に対する批判は聞かれていない。(多)</p>
<p>地元放送エリアは初期に感染が早く広がり、知事が独自に緊急事態宣言を出したこともあった。ナーバスにはならざるを得なかったが、ロックダウンしたり、日常が一切止まったわけではない。しかし、地元の状況に関する素材を自社外から求められ、その対応のほうが大変だった。(多)</p>

⑤ 対象やネタの減少

コロナ禍での取材対象やネタが減ったのかどうかを尋ねた。地方局を中心にお祭りやグルメ情報、取材機会が減り、苦勞しているとの声が聞かれた反面、コロナに関する情報を長めに伝える、コロナの影響を受けていないものを伝えるといった対応で乗り切ったようだ。一方で「コロナ禍だからこそ始まったことを取り上げた」「イベントがなくなったことが大きなネタだった」など困らなかった旨の意見も目立つ。また、結果的にコロナのニュースに頼っていた、といった声も聞かれた。

このほか、「違うものにも目を向けようとした」「取材対象を開拓する点ではいい経験になった」など、ポジティブな意見もあった。

<苦勞した>

地元の祭りや、花火大会が中止になったこと自体も大きなニュースになる。そのことに加え、業者や観光業、宿泊業の人に話を聞いて尺を長くすることはあった。

スポーツ大会が中止になり、当事者の中高生の思いに迫りたいが、視聴率に反映されないのは困った。

コロナに影響しないような地域のほっとするようなネタ、明るいネタを日々探して、尺をねん出すことはあった。取材自体が減ってきたので、そこは大変苦勞した。最近は戻ってきている。(少)

夕方ニュースで出していたグルメや旅物の情報がすべて難しくなった。コロナの話題だけでは展開できない。そのために自宅で楽しめることなど、テレビ的にいろいろな画を出すよう腐心した。また、暗くなりがちな世の中を明るくしようといった趣旨で、コロナ禍においても頑張っている人を少しでも多く紹介したいという思いがあった。(多)

取材機会が確実に減り、ニュース構成が難しかった。日常の取材もなくなって苦勞した。そのために大きなことはしていない。コロナの話題を長めに伝えるなどして乗り切っていた。(多)

地元自治体内で緊急事態宣言が複数回発令され、放送局を見る目も厳しくなる中、それまでやっていた取材や放送をセーブするかどうかなど、都度話をしてきた。緊急事態宣言が出ると、人が集まるようなイベントの取材自体を扱っていいのか、悩みは増えた。(多)

イベント自体がストップしたり、施設の閉館で取材できないなど、構成上の影響がとてもあった。感染対策もあり、集まることを呼びかける中継を控えた。世の中がストップする中で、どう取材をしていくか。オンラインで撮影しても映像が成立しない。なるべくコロナ関連の話題にしたうえで、柔らかいネタ、影響を受けてないものを出した。(多)

<コロナ関連のネタで対応>

(地元) 専門家の先生がおり、コロナである程度大きく展開できた。難しい言葉など未知なものも多く、解説時間がたっぷり取れた。

地元放送エリア、特に本社のある市は全国的にもいち早く感染拡大および収束し、コロナの影響が大きかった。題材はコロナに集中したが、ニュースが構成できない苦勞はなかった。地方のイベントは減ったが、コロナへの関心が高く、バリューがあった。(多)

一時期イベントもなくなったものの、最近またイベントなどが少しずつ動き出しているためネタがない状況はない。観光地や商業施設のコロナ対応など、コロナだから

こそ始めたことを拾っていたので、ニュースの時間が埋まる分はあった。(多)
イベントに頼っている地元自治体ではあったと思うが、イベントがなくなったことが大きなネタだった。コロナによってネタで困ったことはなかった。(少)
地元自治体が常に情報を発信していたので忙しかった。むしろコロナが収まり、世間が落ち着いた時期にネタ探しで困ったこともあった。(多)

<その他>

この期間に“発生もの”の報道も行っている。コロナ一辺倒では飽きてしまうのではないか、という話があったので、人間臭い事案を細かく放送し、取り上げた面もあった。同じものばかりにしないようにしよう、違いものにも目を向けようと内部で判断し、放送した。(多)
取材対象を探し開拓する点ではいい経験になった。祭りなど中止になった点を逆手を取る形で、地元に行ってこれまで支えてくれた人にインタビューするなど声を拾って伝えた。部活動についても自宅でトレーニングしている人を取材した。やれなくて苦労している人を伝える、という考えで対応していた。(少)

(3) デマの解消に向けて行ったこと

ほとんどの社がデマ解消に取り組んでいることがうかがえた。「一番大きなテーマがデマ」と、地元で苦しんでいる人を助けるような報道に取り組んだとの声も聞かれた。デマ解消のための報道にあたり各社が重視したのは専門家の知見。「専門家が地元にいたのが大きい」「複数の専門家に聞き、同じことを言えば間違いないと判断した」といった意見が聞かれた。

また、確証のない情報は扱わない、風評やSNSに振り回されないようにする、さらには「確証のないものは取り上げないほうが広まらない」「品切れなどのニュースは余計に不安をあおるので、なるべくやらない形になった」といった見方も。

このほか、デマをただすことまでには至らなかったとしながらも、ネットでバズるネタには距離を置いた、専門家のメッセージをそのまま紹介した、などの対応がなされていた。

デマの類が起きているといったことについて、うまく取り除き、しっかり知ってもらいたいと番組担当とも話した。
マスクが足りない時は現象を取材。ワクチンの影響については、専門家の客観的な意見を聞いて放送したきたつもり。特別に知ってほしい材料として放送した。
若者の中にはワクチンにネガティブな印象を持っている人もいたが、無視せずに放送で取り上げた。例えばワクチンを若者が摂取したとされないと言われてきたが、打つ場所やタイミングがないことが分かったので大きく取り上げた。若者は打たないのでなくタイミングないということ、若者の声とともに知ってもらおうとした。(多)

一番大きなテーマにデマがあった。SNS上に感染者が立ち寄った地元飲食店に対するデマや、感染者に対するデマで苦しんでいる人がおり、できるだけ正した。ワクチン接種に関しては、専門家や地元自治体を信じるしかなかった。メリットのほうが大きいと思っていたので、呼びかけを中心に報じていた。インターネットに上げると批判めいたコメントはあったが、局に抗議の電話等はなかった。あまり気にせず専門家や病院の先生を信じて報道していた。(多)

ワクチンを打ったら妊娠ができない、というデマが流れていた。地元で専門家が2人いるので確認。海外の研究も目を通してあるので、それを基に海外でも確認されていないと説明した。明らかに人々を不安に陥れるようなデマでこのような報道を行った。

ファクトチェックの部分では、ベテラン記者でも今までみたことない病気で、取材したこともないので、専門家の意見を聞いたことがある。感染予防のスペシャリストが地元でいたことが大きい。(多)

コロナで分からないことが多かったので、とにかく複数の専門家に聞き、同じことを言えば間違いない、という判断をしていた。デマでは地元自治体内で詐欺案件が増えたので、積極的に紹介した。デマに関する情報はキー局からのほか、社内でもSNSで話題になっていることを調べる担当がいた。そこから専門家に尋ね、解消する報道などを組んだ。(多)

地元知事に誤った認識に基づく発言があった。専門家の知見として有用であるとの確証が取れなかったため、報道で扱わなかった。デマに関する情報は、報じるうえで専門家への取材を行っていた。また、本当に感染対策として有用かどうか、専門家のコメントを添えて放送するようにしていた。(多)

いろいろな情報が出回り、それに基づく事象が出たときはそれが正しいかどうか常に検証しなければならない。そのために専門家に話を聞いた。聞けば答えてくれる専門家との関係も確立していた。(多)

地元エリアでのデマはそれほどひどくない。混乱をきたすこともあまりないが、小さな自治体、町の噂のレベルで記者が入手してくるものはあった。

正確性のないものはニュースとして取り上げない。例えばマスクがなくなった、トイレットペーパーがなくなる等のうわさが流れた時は混乱したが、なくなることはないことを示すべく、製紙工場や流通の取材をして、皆さんの手元に届く、という安心報道はした。

混乱をきたしたのは感染拡大の最初のころ。繁華街でクラスターが起きて、経済のダメージでのデマやうわさが尾を引いたことはあったが、意味のない、裏付けのない安心報道は難しいし無責任だ。正確性のないものは、取り上げないほうが広まらない

<p>というスタンスだった。(少)</p>
<p>最初のころはマスクがない、などというニュースをやってしまったが、それが余計に不安をあおることにつながるの、なるべくニュースにしなかった。感染者が出たというデマが流れた企業があったが、取材をして、実際にどういう被害があったのか、なぜデマが出たのかの心当たりを話してもらい、特集を組んだ。感染者について、最初のころは犯人捜しのような勢いだった。田舎で1人感染者が出ると、どこの誰かとすぐに分かってしまうようだ。(少)</p>
<p>ふだんから、風評やSNSに振り回されないように、日々のリテラシーとして取り組んでいる。また、事実確認は必ず行うようにしている。専門家のインタビューを長めに取って、SNS上などで言われていることへの正確な情報提供を実施。地元の大学などの専門家を頼りに、正確な情報を流すことに取り組んだ。(少)</p>
<p>ニュースのネタとして、デマに関する報道は触れていない。医療機関のひっ迫状況やコロナ病床の状況などにとどめている。</p> <p>部内の情報共有においては、ネットに出てバズるコロナの話題には距離を置いて、冷静に見よう、ということを2020年2月から徹底している。ある種の風邪薬が危険、といった情報は鵜呑みにせず、必ず医療機関の専門家に聞き、裏付けがないと難しいと内部で伝えた。(多)</p>
<p>デマを正すために情報を出すところにはまでは至らなかった。専門家会議や行政が発信する、権威のある学者のメッセージをそのまま紹介した。</p> <p>ワクチン接種をめぐり、誤解のない情報発信のため、識者のメッセージを紹介するようなことに会社全体で取り組んだ。(多)</p>

(4) ウィズコロナ時代の取材・報道への提言

ウィズコロナ時代の取材・報道で必要なことや求められること、展望などを聞いた。視聴者に向けては、世の中が明るく、前向きになるような報道に取り組みたい、とのポジティブなメッセージが聞かれた。

また、「何のために放送するのか、自分自身の中で明確な理論を」「きめ細かい情報を伝え続ける」「正しい情報を出し、信頼関係を作る」「本当に大事な取材は何かを見つめ直す」など、報道のあり方を問う声も多い。

さらに、リモート取材などに可能性を見出す意見も聞かれた。一方で、コロナ禍でオンラインのインタビューが増える中、記者の足腰を再点検する必要があるとの声や、直接取材が難しい中、あらためて取材先に足を運ぶことの重要性を説く意見も聞かれた。

<明るく、前向きな話題を>

都心から移住し、リモートワークで働くことを地元自治体が推奨し、支援している

が、こういうネタを増やし、地元に戻ってきた人へのインタビューなどを行っている。コロナを逆手に取って頑張っている人など、生き残りの道を探るネタも増やしている。コロナで暗くなるのではなく、明るくなるようなネタを今後も見つけては出したいと考えている。

コロナ禍でもリモートでいろいろな取材でき、現場に行かなくてもインタビューをして、映像を提供してもらえればネタが成立することが増えている。それでニュースの幅も広がるとプラスにとらえている。(少)

放送を通じて前を向いていただけるような報道をしたい。ネガティブな内容を伝えることもあるが、われわれの社会活動を止めず、視聴者が前向きに生きることに貢献したい。

他方で、いろいろ止まってしまったことを何とかしなければならない。ウィズコロナ時代にはそうしたことにも取り組みたい。コロナから逃げられない以上、うまく付き合い、気を付けながら、やれることをやる。そのことと放送が結びつけられたら。

チームとしては継続的で、行き当たりばったりにならないような取材をしていきたい。コロナを一生懸命取材してきた記者もいる。その成果を記者として作り上げてもらいたい。(多)

<リモート取材に可能性>

マスメディアとして、正しい情報を出し、信頼感を築くのが一番重要ではないか。今は、ネットメディアに速報性などで劣っている。ただ、ネットには正しくない情報もある。本当に正しい情報は何かきちんと検証していくことがテレビには求められているのではないかとあらためて思った。

個別の取材では、リモート取材・オンライン取材が一般的になってきている。われわれとしては、これまで地元の専門家や病院にしか取材してこなかったが、オンラインだと日本中誰もが取材対象になりえる。オンラインの取材が定着したことで、より取材の範囲が広がったととらえ、今後、自由な取材をしていけないかと考えている。(多)

正直なところ、現時点では取材体制を維持するだけの状況で、ウィズコロナで新しいことや、今後を考える段階には至っていない。

リモート取材が浸透している。それは今までなかったことだ。地元の市町村すべての首長にリモートでインタビューする企画を行った。行政の担当者にもリモート取材の方法を覚えてもらい、これを機に災害時にも生かしていけるような体制を作ることにもつながった。こうしたことを今後も生かしたい。

できることをきちんと行い、体制は維持したうえで、リモートなども工夫をしていく。(多)

リモートで出演することや、インタビューすることへのハードルが下がった。これまでではあり得ないと思っていた手段で遠隔地の人でもアプローチできるようになったと前向きにとらえたいと思っている。一方で、直に行けるならば行きたい。どちらにするかで悩むことになるだろう。

これだけ感染の波を繰り返すと、これが日常になっていくのだろうとの思いもある。緊急事態宣言が解けたが、日々の取材や報道の仕方が緩んだかというところもなく、変わっていない。

テレビの信頼性について、これまでは人が入れないところにテレビだから行ける面があり、それが役割だった。しかし、ことコロナの問題になると特別ではなくなり、特別扱いされること自体良くないのではないかとの風潮が垣間見える。一般の市民と同じ感覚で、取材・報道をしていかなければならないと痛感している。

上から目線やわれわれは知っている、という感じではなく、輪の中に一緒に入り、話していただくといったスタンスに変わってきている気がする。(多)

<報道を見つめ直す機会に>

コロナの問題では、アクセルのかけ方ブレーキの踏み方がものすごく難しい。放送エリアは観光で成り立っている部分が多い地域で、もろ手を挙げて来てもらおうと第3波、4波のようになり、他方、観光を止めると経済が止まる。

楽しむべきことは楽しむべきだし、ただ、決められたルールをしっかりと守ろう、という報道をしていくしかないのではないか。制限や過剰な恐怖、過剰なあおり、一方で過剰な開放へのあおりには気を付け、どこか逆手の目を持っていなければならないと思う。

Go Toキャンペーンで、一斉に食事や旅行に行こう、と伝えるけれど、こういうところに十分気を付けよう、など一言添える。逆に感染やクラスターが起きた場合でも、こういうことを守って旅行を楽しむのは悪いことではないなど、逆の視点や補完というものを必ずつけて、情報番組も含めて報道することが大事ではないか。

今だけではなく、この先がどうかということ、誰のため、何のためにこの放送していくのか、自分の中で明確な理論を持ち、説明できるようにしないと、ことコロナに関しては不用意なことにつながりかねないのではないか。(多)

正直なところ、いつまで続くのか、いつまでやればいいのかが見いだせていない。コロナがあってから入ってきた報道記者は、コロナありきで物事が動いている。日々の報道のベースとなる部分に触れずに来てしまっている。コロナが発生してから交通事故が極端に減り事件・事故も激減した。いいことだが報道部に新しく入った若手記者がそれらに触れる機会が減っている。コロナが落ち着いて、ウィズコロナ・アフターコロナの時にきちんと踏み出せるのか、心配は日々感じている。

報道の難しさでいえば、どこまで踏み込み、個人の権利をどこまで守り、どこまで公にするかの判断ができるのかどうか。SNSが活発に活用される中、放送局として公平性を保ちながら記者活動をする目を養えるか、耳を養えるかは大きな課題になるだろうし、今、経験している人にとっては今後役に立つのではないか。（少）

コロナは直接取材に行けなくなったことに大きな影響があった。人脈形成が難しい。本来の多くの人と接するところが阻害された。リモート取材やSNSの活用で便利になっている面もあり、うまく活用していくが、直接取材で相手の信頼や広がりを得ることは重要。コロナがいつまで続くか先が見えない中、取材先に足を運び、心と心で向き合うことが重要ではないか。

警察担当記者などが夜回り取材で幹部と顔を合すことがなくなり、警察からも署内に来るな、などと言われる。人脈を築くことができるのかが厳しい。

一方で、ゼロベースから取材を組み上げるいい経験になった。本来取材とはそういうものだと感じた。ものを言いたい人のニーズをつかむことは大事だ。（少）

われわれの中でウィズコロナの時代にライフスタイルを提案するほどの提言能力があるのか、あるいは私たちにそれが求められているのかどうか。考えるのは視聴者1人1人であり、新たな生活様式を見つけた人がいるのであれば紹介し「こういう生き方がある」ということを誠実に取材し伝えていく。これを愚直に行っていくことが視聴者に一番求められているのではないか。

コロナを理由に行政が説明責任から逃れることが今後あると思う。そこには気を付けていかなければならない。

取材方法について、オンラインのインタビューでしか情報が取れないと、コロナ以前の方法がすたれ、取材の足腰が弱っていくかもしれない。そこをもう一度点検していかなければならない。（多）

コロナ禍でどういう取材をしていくのかを一度考えたことがある。無駄とは思っていなかったが、なくてもできることがあるのが分かった。コロナがずっと残るのであれば、取捨選択を行い、何が本当に大事な取材かを見つめ直し、これまで他に振り向けていた分を掘り下げることにつなげていければと考えている。テレビ報道のやり方を変えていくことにつなげる契機にしてもいいのではないか。

限られた時間でものごとを伝えているので、街録一つ取っても「こういうことを言わせよう」など、落としどころを考えることが多い。見方によっては差別の対象になりかねないこともある。行って撮れたものを「考えてみたら、こういった使い方をするのが実態に合っている」など恣意的に思い込まないようにする。あるいは両論を出したり、思っているものと違うものが撮れても素直に出すようにしなければならないのではないか。これが現実に撮れたこと、という出し方をすれば「ちゃんと切り取っ

た」ことになる。

コロナはよい契機とは言えないが、伝え方を見つめ直すきっかけにはなったと思う。(多)

<その他>

今の状況が2年間近く続いている。第6波も警戒しようというスタンスで報道を続けている。現在も今の2班体制の状態を続け、冬に備える形を取っている。いきなり緩めるのは怖い。

コロナに関する感染者の状況は逐一変わっていくので、報道としてそのアンテナを敏感にしていかなければならない。

感染者が減る中、経済活動がどのように再始動しているのかなどは極力扱うようにしている。(多)

放送エリア内の感染者が抑え込めたのは、デマにも負けず、どれが真実か、ローカルメディアが真実を伝え続けたからという自負がある。それがローカルの力だ。地縁で情報を知ることもあった。正しい方向に導く、ローカルだからできるきめ細やかな情報を伝え続けたい。(少)

(5) まとめ

① 取材

取材時のスタッフの感染への不安について、コロナの感染拡大初期の段階での不安や葛藤に関する意見が多い。他方、事件現場と同じ、取材すべきものは取材するとのスタンスで臨んだとの意見もあった。

取材者が感染の媒介になることへの不安に関し、取材先に来ないでほしいといわれたことなどの事例が明かされた。

さらに、取材時の映像が画面にどう映るかに配慮したとの声も多かった。

コロナ患者を収容した病院の取材について尋ねたところ、外観のみ、あるいは内部は関係者に機材を渡して取材したなどの実態が浮かび上がった。

チーム内での意見や意識の違いに関しては、コミュニケーションでロスがあったことなどが浮かび上がった一方、記者の意思を尊重したなどの声が聞かれた。

また、人員不足の中で効率よく取材を進めたこと、スタッフの知識のアップデートに関しても地元の専門家をよすがにしたことなどもうかがえた。

② 報道

各社とも社会不安をあおらないような報道に腐心。感染者数をめぐっては、発表の速さを競う流れに疑問を感じたなどの意見もあった。

感染者や取材対象のプライバシーに関し、配慮を行ったうえで、どこまで報道するかのジレンマに悩んだ様子が見られた。

感染者数の報道については、伝えることの意味を強調する意見が目立った。

③ デマの解消

ほとんどの社が取り組んでおり、その際にも専門家の意見を重視している。

④ ウィズコロナ時代の取材・報道への提言

ウィズコロナ時代の取材・報道に関し、視聴者に向けて世の中が明るく、前向きになるような報道に取り組みたい、といったポジティブなメッセージが聞かれた。

また、報道のあり方を問う意見、リモート取材に可能性を見出す意見とともに、直接取材が難しくなる中、あらためて取材先に足を運ぶことの重要性を説く意見もみられた。

